

今週の為替相場見通し(2016年5月9日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		105.55 ~ 107.50	107.12	104.50 ~ 108.50
ユーロ	(ドル)		1.1386 ~ 1.1616	1.1407	1.1200 ~ 1.1700
(1ユーロ=)	(円)		121.48 ~ 123.22	122.13	121.00 ~ 125.00
英ポンド	(ドル)		1.4415 ~ 1.4770	1.4435	1.4300 ~ 1.4550
(1英ポンド=)	(円)	*	153.65 ~ 156.66	154.56	152.50 ~ 156.00
豪ドル	(ドル)		0.7338 ~ 0.7720	0.7370	0.7200 ~ 0.7500
(1豪ドル=)	(円)	*	78.18 ~ 81.96	78.91	77.00 ~ 81.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 橋 雄史

(1)今週の予想レンジ: 104.50 ~ 108.50 円

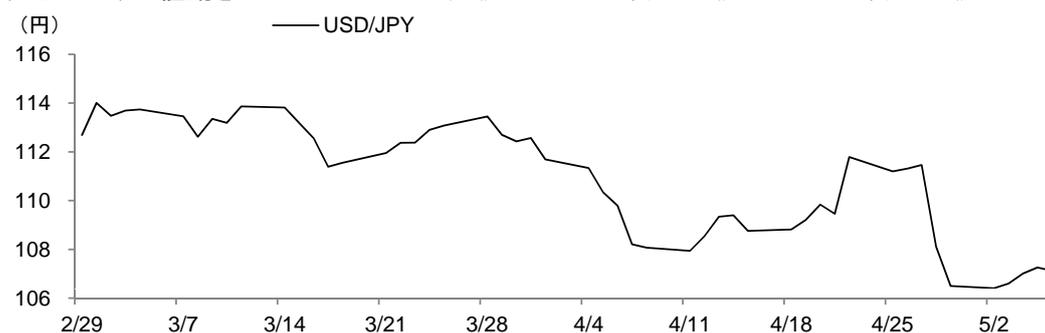
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は年初来安値を更新する展開。週初2日、106円台前半でオープンしたドル/円は前週末28日に日銀が金融政策の現状維持を決定したことや29日の米為替政策報告書で日本が監視リストに入ったことなどを背景に円買いの流れが継続し、106円台で上値重く推移。3日は、豪州準備銀行(RBA)による予想外の利下げや欧州株価の下落を受けてリスク回避姿勢が強まると、ドル/円は一時年初来安値となる105.55円まで下落。その後は、ロックハート・アトランタ連銀総裁のタカ派コメントを受け、ドル/円は106円台前半まで買い戻された。4日は、米4月ADP雇用統計の市場予想を下回る結果に106円台前半で推移する場面も見られたが、米4月ISM非製造業景気指数などの良好な結果を受けて107円台前半まで上昇。5日は、カナダでの大規模な山火事を背景に原油価格が上昇したことや米新規失業保険申請件数の市場予想を上回る結果にドル売りが強まると、ドル/円は106円台後半まで反落したが、その後は買い戻しが入り、一時週高値107.50円まで上昇した。6日は注目の米4月雇用統計で、非農業部門雇用者数(NFP)が予想前月比+20万人に対し結果同+16万人となったことでドル売りが強まると、ドル/円は一時106.44円まで下落。しかし、ダドリー・NY連銀総裁から「依然として年内2回の利上げを妥当な水準」との認識が示されると、その後はドル買いが強まり、ドル/円は107円台を回復した後、107円台前半で越週した。

今週のドル/円相場は上値重い推移を予想する。先週は本邦が大型連休で市場参加者も少なくなる中、ドル/円は一時105円台まで円高が進行。前月末の日銀金融決定会合では、市場予想に反し、現状の金融政策が維持されたことで、投機勢の円売り期待が剥落し、日経平均も16,000円台を割り込むなど、リスクセンチメントは後退傾向にある。また米国サイドでも、先週末に発表された米4月雇用統計が力強さに欠ける結果を示したほか、米1~3月期GDP(1次速報)などの米経済指標が冴えない結果を示すなど、FRBの思い描く「年内で1~2回の利上げシナリオ」は、徐々に不確実性を増してきている。今月は日米欧で金融政策の発表も予定されておらず、米国の6月利上げシナリオを検討する上では、順次発表される米経済指標とFRB高官の発言が焦点となるが、今週13日(金)に発表される米4月小売売上高には注目が集まろう。日米の双方向でドル高円安シナリオが描きにくい状況下、今週のドル/円は上値重い展開をメインシナリオと考えたい。

(3)先週までの相場の推移

先週(5/2~5/6)の値動き: 安値 105.55 円 高値 107.50 円 終値 107.12 円



2. ユーロ

(1) 今週の予想レンジ: 1.1200 ~ 1.1700 121.00 ~ 125.00 円

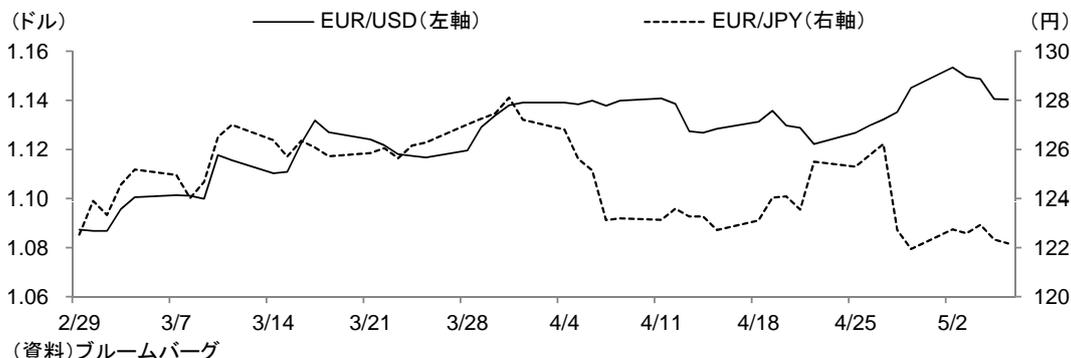
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ相場は週前半に上昇し、週後半にかけて下落する展開となった。週初2日、対ドルで1.14台後半、対円では122円台前半でオープン。前週末28日に日銀が金融政策の現状維持を決めたことや29日の米為替政策報告書を背景に円買いドル売りの流れが強まる中、対ドルで1.15台前半まで上昇。3日にかけてもドル売りが継続し、一時週高値となる1.1616まで値を上げた。しかし、高値警戒感もあったのだろう、その後は米金利低下にも拘わらずユーロ売り・ドル買いとなり1.15近辺まで反落する流れとなった。4日は、アジア時間に対円で一時週高値となる123.22円をつける。一方、対ドルでは米4月ADP雇用統計の低調な結果を受けたドル売りにやや値を上げるも、その後発表された米4月ISM非製造業景気指数などの良好な結果にドル買いが強まると、1.14台後半まで反落した。5日にかけてもドル買い地合いが継続する中、対ドルで一時週安値となる1.1386まで下落した。6日のアジア時間は同日の米4月雇用統計の発表を控えて小動きとなる。同雇用統計は非農業部門雇用者数が市場予想や節目として意識される前月比+20万人を下回る結果となり、ドル売りから一時1.14台後半まで上昇するが反応は一時的。対円ではドル/円相場が円高に振れたこともあり一時週安値となる121.48円を付け、結局対ドルでは1.1407で、対円では122.13円で越週した。

今週のユーロ相場は底堅い展開を予想する。今週はユーロ圏で複数の重要指標が発表となるが、基本的には欧米の金融政策に対する思惑が相場を左右しよう。先週末に発表された米4月雇用統計は非農業部門雇用者数で前月比+16万人と市場予想を大きく下回った。これを受けて市場では米国の利上げ観測が後退しており、今後ドル買い圧力は徐々に低下することになるだろう。一方のユーロは、ECBによる金融政策の限界が取り沙汰されている。ユーロ圏は大幅な経常黒字でありフローからはユーロ買い圧力が強い。金融政策によるユーロ安圧力がなければ、基本的にはユーロは底堅く推移しよう。先週、一時1.16台前半まで上昇したものの、その後反落しているが、一旦は高値警戒感から投機筋のユーロ売りなどが入ったほか、日本の金融政策や米為替報告書により日本が為替操作の監視リスト入りしたことで円買い優勢の地合いとなったこともあり、対ドル・対円の両面でユーロの上値が押さえられたということだろう。今後も特に対円でユーロの上値が押さえられる展開は意識したいところだが、対ドルで考えた場合には上述した金融政策・経常フローの両面からユーロは徐々に上昇すると考えたい。今週の注目材料として13日(金)にユーロ圏1~3月期GDP(速報値)、独1~3月期GDP(速報値)、独4月消費者物価指数(CPI)(確報値)などが発表となる。

(3) 先週までの相場の推移

先週 (5/2~5/6) の値動き: (対ドル) 安値 1.1386 高値 1.1616 終値 1.1407
(対円) 安値 121.48 高値 123.22 終値 122.13



3. 英ポンド

(1)今週の予想レンジ: 1.4300 ~ 1.4550 152.50 ~ 156.00 円

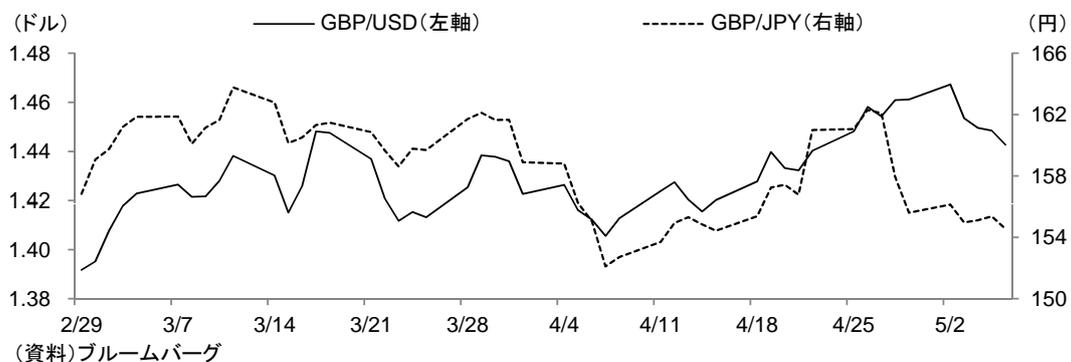
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドルでは続騰の先行後、急反落、対円では28日の急落の延長でほぼ一貫した軟調推移継続。3日までのポンド/ドルの続騰は、27日の米連銀公開市場委員会における利上げ見送りを受けたドル全面安の延長と言えただろう。28日以降の円全面高も、同日の日銀金融政策決定会合における追加緩和見送りを受けた値動きと言えた。3日、ポンドが天井を打って反落を始めたきっかけは、同日発表された英4月製造業購買部指数の下振れと考えられた。同指数は49.2と、景気拡大/後退の分岐点となる50.0を39か月ぶりに割り込んだ。その後発表された同建設業指数、サービス業指数も、50.0こそは上回ったものの、いずれも前月の水準、市場予想を下回った。市場では、「6月に実施される英のEU残留の是非を問う国民投票に向けての不透明感が、足許実体経済に悪影響を与え出している」といった解釈まで聞かれ、英景気の悪化が殊更懸念された。また、この間の円全面堅調の背景には、上述日銀による追加緩和見送りに加え、米財務省の半期為替報告書(29日)の中で日本が為替操作の監視対象国のひとつに挙げられた経緯も影響したものと考えられた。加えて、主要通貨の中でポンドが特に軟調に推移した理由のひとつに、対ドルで昨年末の終値(1.4730)を3日までに一時上抜けたというテクニカルな要因を敢えて挙げることもできただろう。1月4日につけた年初来高値(1.4815)は更新できなかったものの、高値達成感やポンド売り持ち高の整理から、調整的なポンド売りを誘い易かった可能性は考えられただろう。

今週の英ポンド相場は対ドルで軟調気味の横ばい、対円では一段と下値を探る値動き、即ち足許方向感の継続を見込む。6日発表された米4月雇用統計は、非農業部門雇用者数こそ160千人増と失望を買う内容だったが、平均時給は前年比+2.5%と安定しており、労働市場全体として「弱い」というほどの内容でもなかった。主要通貨の反応も、ドル売りよりは、むしろ円買いに勢いが感じられた。主要通貨の中で現在円が頭ひとつ抜きん出て堅調なのは、経常黒字の拡大基調という円高要因を、金融緩和という円安要因が打ち消し切れなくなっているということであろう。とりもなおさず、それは、物価押し上げに対する日銀金融政策の手詰まり感の反映でもある。また、米財務省の為替操作監視対象国に指定された日本が、とりわけ5月26/27日のG7首脳会合の議長国として、円売り介入には動けないとの思惑も、円先高観を補強する材料。こうした円高基調が早晚転換する展開は想定しづらい。一方で、英景況感の悪化も、上述の通り、「英のEU離脱の可能性に対する不透明感」が積極的な設備投資などのブレーキになっているのが原因との認識が広がりつつある。実際に英経済指標に失速が顕在化しつつある現状があって、やはり6月23日の英国民投票が決着するまでは、こうした弱気の払拭は難しいであろう。12日(木)には英中銀金融政策委員会の決定、議事録、同四半期インフレ報告書が発表される。金融政策の据え置き予想は衆目の一致したところで、注目はインフレ報告書だが、物価上昇や賃金上昇に警戒感を示す可能性はあっても、近い将来の利上げの地均しと読まれる可能性はおろか、英のEU残留/離脱にまつわる不安感を和らげられる可能性も考え難い。他にも9日(月)にハリファックスの2~4月住宅価格、10日(火)に3月貿易収支、11日(水)に3月製造業/鉱工業生産、王立公認不動産鑑定士協会(RICS)の4月住宅価格などの英経済指標が予定されるが注目は低い。

(3)先週末までの相場の推移

先週(5/2~5/6)の値動き: (対ドル) 安値 1.4415 高値 1.4770 終値 1.4435
(対円) 安値 153.65 高値 156.66 終値 154.56



4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.7200 ~ 0.7500 77.00 ~ 81.00 円

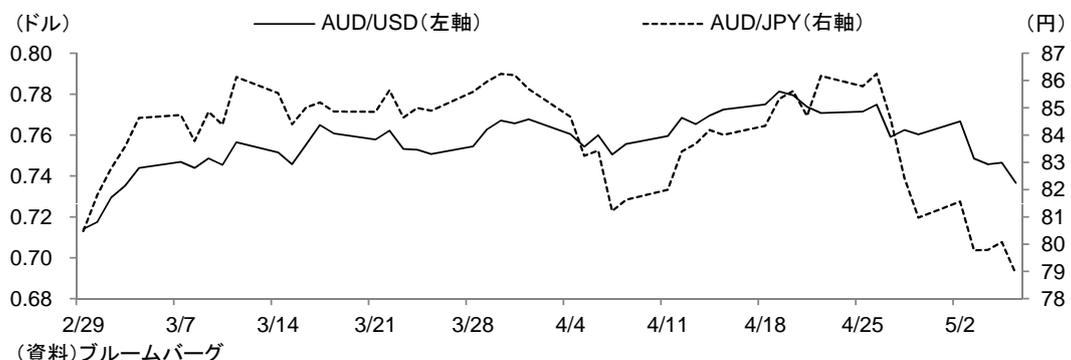
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、豪州準備銀行(RBA)理事会による利下げを受けて軟調推移。週初2日、豪ドルは対ドル0.76台前半にてオープン。米国時間に発表された米4月ISM製造業景気指数の下ぶれを背景としたドル売りを受け、豪ドル相場は0.76台後半まで上昇。翌3日、RBA理事会前には豪3月住宅建設許可件数の事前予想を上回る良好な結果を受け、豪ドル相場は週高値となる0.7720まで上昇。注目されたRBA理事会では政策金利を従前の2.00%から過去最低となる1.75%へ引き下げる事を決定。これを受け豪ドル相場は週高値水準から0.75台半ばまで急落。一時買い戻しが見られたものの、欧米時間にも軟調地合いは継続し、0.74台後半まで下落。週央4日、鉄鉱石など商品価格の下落を受け、豪ドル相場は0.74台半ばまで再度軟化。翌5日、発表された豪3月貿易収支の赤字幅が事前予想を下回った事や豪3月小売売上高の事前予想を上回る良好な結果を受け豪ドル相場は反発上昇。アジア時間には0.75台前半まで水準を切り上げた。しかしながら欧米時間までは上昇は継続せず、再び0.74台半ばまで水準を戻した。週末6日、公表されたRBA四半期金融政策報告書では2016年の基調的インフレ率見通しを+1~2%と前回2月時点の+2~3%から引き下げられた。これを受け豪ドル相場は0.74を割れて急落。米国時間には米4月雇用統計の軟調な結果を受け週安値となる0.7370をつけ、0.73台後半の安値圏にて越週した。対円では週初2日に80円台後半にてオープン。対ドル同様、3日のRBA理事会結果直前に週高値となる81.96円をつけた。その後も対ドルと平仄を合わせて推移し、週末6日の米雇用統計直後に週安値78.14円をつけた後、78円台後半にて越週した。

今週の豪ドル相場は上値の重い展開を予想する。足許ではRBA四半期金融政策報告書で示された基調的インフレ率見通しの引き下げを受け、更なる利下げ期待が醸成されている。OIS市場や金利先物市場における次回6月理事会での利下げ織り込みは30%台まで上昇しており、今後は追加利下げ実施の有無や追加利下げタイミングといった金融政策に関する思惑が相場のメインドライバーとなるだろう。今週予定されるエディRBA総裁補佐講演では今後の金融政策運営に関する内容に注目が集まるが、今後の政策自由度を確保する上で「必要があれば行動する」とのスタンスの発言を行う可能性が高いと考える。斯かる状況では、追加利下げ期待は高まりやすく、豪ドル相場の上値を押さえることとなる。また、住宅市場の過熱は追加利下げの足枷となるが、RBAは「規制措置により住宅市場のリスクは抑制されている」との評価を従前から示している。今週予定される住宅ローン件数が予想通り抑制的な結果となれば、こちらも追加利下げ期待を高める材料となる。なお、今週の主な経済指標・イベントとしては、11日(水)に豪5月ウエストパック消費者信頼感指数および豪3月住宅ローン件数、12日(木)にエディRBA総裁補佐講演が予定されている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週 (5/2~5/6) の値動き: (対ドル) 安値 0.7338 高値 0.7720 終値 0.7370
(対円) 安値 78.18 高値 81.96 終値 78.91



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。